

保育者養成における表現活動の横断的アプローチ

－音楽表現と造形表現の総合的授業実践－

中 村 浩 美・山 中 慶 子

Cross-Sectional Approach for the Expression Activities
at the Department of Early Childhood Education
－Comprehensive Practice of Musical Expression and Artistic Expression－

Hiromi NAKAMURA・Keiko YAMANAKA

キーワード：音楽表現、造形表現、保育学生

1. はじめに

1－1. 研究の背景

幼児教育では、ある事柄から一つの学びを得るのではなく、自然との関りや社会生活のなかで心を動かす出来事に出会い、ものを作ったり、歌ったり、音を鳴らしたり、身体を動かしたり、友達と語り合う中で、表現する喜びを味わい、物事への意欲が育まれることが望ましい姿である。平成30年4月施行『幼稚園教育要領』、『保育者所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』¹⁾に示される、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿には(10)豊かな感性と表現「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友だち同士で表現する過程を楽しんだりして、表現する喜びを味わい、意欲を持つようになる」と示される。子どもたちが、心を動かす体験を基に感受性を働かせ、様々な表現方法を使って感じたことや考えたことを表すことができるようになることが幼児教育のねらいであるといえる。

幼児教育における領域表現は、楽器や声による「音楽表現」身体運動による「身体表現」、言葉による「言語表現」、ものづくりや絵画による「造形表現」に区分される。保育者技術として、ピアノ

ノを弾く、歌を歌う、モノを作る、絵を描く、身体を動かす、など専門的な技術を学び習得することは必須であり、保育者養成校では、各専門分野で基礎技術の習得を目的とした授業が行われている。しかし、その技術を活かし科目を越えて総合的に活動を計画したり、環境を構成したりする実践は乏しいのが現状である。領域表現における実践力とは、子どもたちの表現を受け止め、更に発展させていけるような保育者の感性と表現力であることから、保育者は専門分野の基礎的な技術の獲得を基に「豊かな表現力」と「保育の構成力」を培う必要があると考える。

表現は幼児の生活の中で密接に繋がっており、切り離して考えることはできない。幼児期の教育は、「環境を通して行うものであることを基本とする」¹⁾ことから、保育者には、幼児の活動がさまざまな表現に結びつき、総合的に表現する力を育むことができる環境の構成力が求められる。そのためは、保育者が日頃から表現の結びつきを意識し、幼児の表現力を総合的に育む視点を持つことが必要であると考えられる。

1－2. 領域表現における「造形表現」

領域表現における「造形表現」が他の表現領域と異なる点は、モノと関わり、作ったモノが形と

して残る点である。平田（2010）²⁾は、「造形行動は内的循環（感じて、考えて、行動する）の繰り返しであるとし、その繰り返しによってイメージを広げたり考えを深めたりなどしていく」と述べている。幼児教育において、モノを作る行為は、自分の思いやイメージを形にしていく過程が重要であり、モノとかかわる行為そのものが魅力となる。

モノとかかわる造形活動では、多くの場合、材料や道具が必要であり、保育者は事前に子どもたちが主体的に活動できる環境を準備しておかねばならない。このような特性から、造形活動は保育者があらかじめ活動を設定して行われることが多く、幼児の造形活動における自由度や流動性は、保育者の経験やスキルによって大きく変化する。

幼児の主体性を尊重するならば、幼児の興味や行動によって活動が様々に発展することを想定し、それを見越した環境構成が必要である。時には、造形表現から音楽表現や身体表現へと活動が発展する可能性も考えられる。幼児の主体性に沿った流動的な保育を実践するためには、子どもの視点に立って表現を予測し、展開を考えて環境を構成する保育者の高い力が求められるといえる。

智原ら（2015）³⁾は「科目を横断的に連携させたクロスカリキュラムを実践することは、保育における総合的な実践力養成の観点から重要である」とし、領域表現の活動について保育現場での表現活動の実態を調査している。その結果、「多領域を関連させた活動として、音楽・身体・言語表現の活動は関連させて実施されていることは多いが、造形表現は単独で実施されていることが多く、他の表現活動との関連が弱いことが明らかになった」とし、造形活動の他領域との関連の弱さを指摘している。

1－3. 領域表現における「音楽表現」

本学での音楽領域に関する科目は、1年次「子どもと表現（音楽）」、「子どもの歌と伴奏法」、2年次「保育と音楽表現」が実施されている。歌唱と伴奏法といった専門技術の習得のために、非常勤講師を含めた教員によって細やかな個別指導が

行われ、学生は保育実習や教育実習での実践に向けて、日々練習に励んでいる。

保育現場では、日常的に保育者がピアノを弾きながら歌を歌ったり、園行事においてもピアノ演奏が行われる事があるため、保育者にとって歌唱や伴奏法は習得しておくべき専門技術である。しかし、保育者に必要なスキルは、音楽的専門技術だけでなく、いかに音楽を楽しみ、生活の中で子どもたちが音楽に触れる体験をどのように増やしていくかといった活動の構合力でもある。

藤掛ら（2018）⁴⁾は、音楽表現領域において、実習経験での学生の学びを通して、「(子どもたちの)好きな遊び場面において、子どもの興味・関心や育ち、学びを見取り、それを踏まえて環境の再構成や援助の工夫を考える等、日々の保育の中で活かす力を育む養成教育の内容と方法を検討する必要がある」と述べている。技術的に優れていても、子どもの興味関心を読み、音楽環境を構成し援助する力がなければ、子どもの表現を支え活動を発展させていくことは難しい。

歌を歌ったり楽器を奏でる場面では、イメージ力を基盤とした表現力が求められる。子どもの表現を膨らませたり、イメージを喚起したりするために、保育者はペープサートや絵本を通して歌詞の情景を伝えたり、子どもにとって未知なる世界を示したりする。また、劇やオペレッタなどは、造形表現、音楽表現、言語表現が組み合わされた総合的な活動として保育に取り入れられる。音楽表現は、他表現と総合的に実践されることで、子どもたちの興味関心を喚起させ、更に広がり、深まりのある表現になると考えられる。

2. 先行研究

2－1. 教科横断型アプローチ

科目を連携させた教科横断型の学習については、椎橋ら（2018）⁵⁾が、「図画工作科の視点から『投げる』際の人体の構造を理科と関連づけて科学的に理解し、遊びを展開できるような教材づくりの研究」を行い、教職志望学生が、遊び方を創意工夫しながら、教科横断型の学習を構築できるプログラムを実践している。

藤井(2019)⁶⁾は、保育者養成校において学生たちの「表現力」と「実践力」の向上につながる授業研究を行うことで、保育者を目指す学生が表現の源は密につながって結びついていることを理解することが必要であるとしている。また、保育内容表現で総合的に学んだことを「造形表現」などの授業科目とどのように連携させていくかを課題としている。

細田ら(1993)⁷⁾は、実際の保育現場において表現活動の内容を調査し、2つ以上の表現活動が組み合わせられ、発展的に行われた総合的な活動は全体の表現活動の2割に満たないとの結果を得、音楽表現と造形表現の総合的な指導案についての検討を課題に挙げている。

豊泉ら(2018)⁸⁾は、5歳児を対象に音楽表現・造形表現・身体表現をつなぐプロジェクト活動を行い、対話による共同的な学びについて表現活動の可能性を探る視点から、造形・音楽・身体表現といった活動を総合的に捉える必要があることを示している。

上記の研究から、実際の保育現場で表現活動が組み合わせられ発展していくには、子どもの主体性だけでなく、保育者が活動を総合的に捉え表現を結びつけていく視点が必要であることが明らかである。保育者養成において教科横断型の総合的な授業を実施することで、保育学生の領域表現の関連性の理解が深まり、実際の保育の中で発展的な活動を計画し、環境を構成する力が育まれると推測される。

2-2. 保育を構成していく力

磯部ら(2015)⁹⁾は「(保育において) 重要なのは、生活と表現、体験と体験、遊びと遊びをつなげ、広がりや深まりのある保育をどう構築していくかである。『点ではなく、線として広がりつながっていく保育』の構想力が求められている」と述べている。また、「子どもたちは、人間が持ち得ている表現手段、『言葉』『身体』『音』『造形』の全てを駆使して表現を試みる。そして体験したこと、感じたこと、知り得たことのすべてを、それら4つの手段を通して結び付けてい

く」としている。保育の中で、子どもの言葉と身体と音と造形から生まれるイメージが重なりあい、多様な表現の可能性を広げていくためには、保育者の環境構成の力が必要である。子どもが自発的に表現を生み出し深めることを導くのが保育者の役割であり、子どもの視点にたって表現を予測し、環境を準備し、遊びを支える力が保育者に求められるといえる。

幼児の多様な表現の可能性を広げる保育のスキルを養う為には、長年にわたる保育者としての経験と学びが大きいと考えるが、保育者養成校で学ぶ期間に「子どもの視点に立って表現を予測し、環境を準備し、遊びを支える」という視点をもち、モデルとなる活動を授業で経験することも有効であると考ええる。

福山ら(2013)¹⁰⁾は、学生が実施した実習内容の傾向を調査し、「学生は授業であらかじめ行ったものに関しては自信をもって実習を行うことができるが、それ以外については、自分自身で前もって学び活かすことは難しい傾向がみられ、スキルに関しても同様のことがいえる」としている。

新任保育者が、学生時代と限られた就業年数で習得すべき専門的スキルは多様である。故に、学生時代の学びは、各分野で個別に習得されることがほとんどである。磯部のいう「生活と表現、体験と体験、遊びと遊びをつなげ、広がりや深まりのある保育」⁹⁾を実現するためには、『点ではなく、線として広がりつながっていく保育』の構想力の基礎を学生時代から培うことが理想であろう。

以上のことから、保育学生自身が「総合的な保育」の事例を体験でき、現場の保育の中で応用したり工夫したり出来るような保育者養成校の授業の実施が必要であると考ええる。

3. 目 的

本稿は、造形表現と音楽表現に関連させた活動を実施することによって、保育学生が表現の関係を理解し、総合的な保育について主体的に考えることのできる科目横断的な授業について示唆を得ることを目的とする。

4. 方 法

音楽表現と造形表現の実践を伴う2パターンの授業を行う。

対象：「幼児とうた表現ゼミナール」（9名）「造形表現ゼミナール」（9名）学生

活動：（全2回）

A：「手作り楽器でリズム遊び」

○保育学生が、身近な生活素材を使って楽器を製作し、自分で作った楽器を曲に合わせて奏でる楽しさを知る。

○「造形による表現」から「音による表現」へと活動を発展させることで、保育の中での表現のつながりを意識する。

B：「音を形に ～イメージを共有しよう～」

○音のイメージを、形や色で表現する楽しさを味わう。

○「音」から感じるイメージを視覚的に表現し伝えあうことで、他者の感じ方を知ったり、イメージの独自性に気付いたりする。

○絵本の場面を、音・形・色で表現することで、

表現の多様さに気付き、グループでの表現活動の面白さを知る。

Aは、造形表現から音楽表現へ展開していく活動である。Bは、音表現を色や形などの造形として表す活動である。2つの活動を通して、学生が領域表現を総合的に捉え、広がりつながっていく保育を意識し、総合的な活動について考えることができたかをアンケートにより評価する。

また、活動中の学生の様子、アンケート記述内容に基づき、今後の音楽表現と造形表現の総合的授業実践について考察する。

5. 実践と結果

A：「手作り楽器でリズム遊び」（表1）

日時：令和3年6月23日

場所：図工室

指導：中村・山中

参加：学生16名（幼児とうた表現・造形表現ゼミナール）

図工室に、生活素材で作った5つの楽器（ガチャ

表1. 「手作り楽器でリズム遊び」計画

時間	活動の流れ	準備
0' 00	好きな楽器を選んで製作する 〈手作り楽器例〉 ① ガチャポンマラカス ② 風船たいこ ③ スチレントレーギター ④ 牛乳パックギロ ⑤ 紙皿たんぱりん ※材料や装飾の工夫を促す。	〈楽器材料〉 スプーン・ガチャ ポン・ビーズ・ ペットボトル・ 箱・スチレント レー・輪ゴム・空 き缶・ストロー・ 筒・透明フィルム 等)
0' 50	2. リズム遊びを楽しもう 2-1 曲に合わせて楽器を奏でる ♪山の音楽家 ♪大きな栗の木の下で 等	電子ピアノ
1' 10	2-2 「子どもたちだったら、どんな遊びに発展するかな？」 グループで考えて発表する	A3用紙 付箋 プロッキー
	感想記入 活動終了	感想用紙
1' 30		



写真1. 製作の様子



写真2. さまざまな素材を用いたマラカス

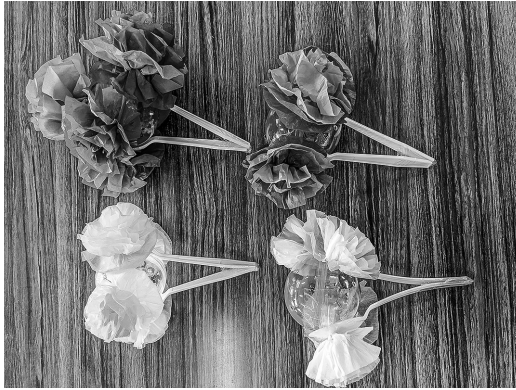


写真3. 花の装飾をしたガチャポンマラカス



写真4. 風船とテープ芯を用いた太鼓



写真5. スチレントレーのギター／ヨーグルトカップのウッドブロック



写真6. 空き箱とラップ芯の太鼓

ポンマラカス・風船太鼓・スチレントレーギター・牛乳パックギロ（紙皿タンバリン）を置いておき、生活素材で楽器を作ってみようという提案した。学生は、楽器を鳴らしてみたり、素材の組み合わせを観察したりしながら、各自作りたい楽器を決めていった。図工室に準備してある素材は自由に使用して良いこととし、例にない楽器も、自分で工夫して製作して良いことを伝えた。教員は、学生からの質問にのみ答え、製作を見守った。

最初は、何を作ろうか迷っていた学生もいたが、次第に製作したい楽器の種類ごとに分かれ、製作を行っていた（写真1）。マラカスの中に入れる素材として、ビーズを準備していたが、鈴やプラスチックチェーン等が用意できないか聞きに来る学生もいた。ガチャポン容器だけではなく、豆腐パックやゼリーカップを用いてマラカス作りを行っていたが、入れる容器が異なると音も変わることから、振って音を確認しながら製作していく姿が見られた（写真2）（写真3）。

風船とガムテープ芯を使った太鼓では、バチに

よって音が変わるため、ストローや割りばしを使って音を確認しながら素材を決定する姿が見られた。音を試した後、油粘土をカラーポリ袋で包んだバチを作成した。スズランテープを編む、太鼓を首から下げる工夫をした学生もいた（写真4）。また、空き箱とラップ芯を使った太鼓や、ヨーグルトカップとスプーンでハンドウッドブロックを作成するなど、楽器のイメージを膨らませて工夫する姿が見られた（写真5）（写真6）。

楽器製作の後、電子ピアノでの演奏に合わせて楽器を奏でてみることを提案した。曲は、音楽教員が挙げたものの中から学生が選曲し、歌唱しながら自由に楽器を演奏したり、パートに分かれて奏で方を工夫しながら演奏したりした。

〈学生が選んだ演奏曲〉

- ・山の音楽家
- ・海
- ・ほたるこい
- ・大きな栗の木の下で（替え歌）

それぞれの曲調に合わせて、奏で方を変えてみ

表2.「手作り楽器でリズム遊び」感想

今日の活動を通して感じたこと、考えたこと	子どもの表現活動を支えるとき、どのようなことが大切であると考えているか
・楽器を鳴らすだけではなく、身体を使ってダンスをしたり、いろいろな表現の仕方があると感じた。 ・楽器を作るだけでなく、作った後の流れ次第で、遊び方や表現の場は無限に広がると思った。 ・一つの歌でも、歌い方を変えたり、音の鳴らし方をアレンジすることで子どもの思考力を育てることに繋がると感じた。 ・廃材が楽器になるという製作も楽しいが、作った後も音遊びができることが良いと思った。歌にアレンジを入れることで、より子どもたちも面白いと感じると思う。 ・風船の張り具合で音の高さが変わること気付いた。自身の保育実習の参考にしたい。 ・楽器を作りながら、いろいろな人のアイデアを共有しながら出来たのが楽しかった。一つの楽器で、多くの活動に展開できることを知り、自身の保育に活かしたい。 ・身近にある素材を使って簡単に楽器を作ることができ、それぞれ違ったものが出来るのが面白かった。できた楽器を使って音楽に合わせて鳴らしてみると、子どもたちもとても楽しく遊べると感じた。 ・製作するだけでなく、それをどのように活かしていくか、皆の意見を聞いてよい学びになった。実習に役立てたい。	・保育者も活動を楽しみ、製作してからの展開を大切にしながら活動計画をたてる。 ・どのようにしたら子どもたちが楽しむことが出来るかを考えることが大切だと思った。グループで話し合うことで多くの案を聞くことが出来て良かった。 ・子どもが活動を自分たちで広げていけるための援助、声掛けが必要だと思う。 ・子どもたちが作りたいものを作る事が出来るように、材料の種類をたくさん準備することも必要だと感じた。 ・表現が苦手な子どもも楽しく取り組めるような活動を行う。 ・子どもが、自分の思う作品を作り、自分なりの表現で音を出したりできるようにすることが大切だと思う。 ・子どもが自由に考えたり表現することができ、一つの活動で終わらず発展していける活動であること。 ・子どもが「やりたい」と思えるような活動であること。

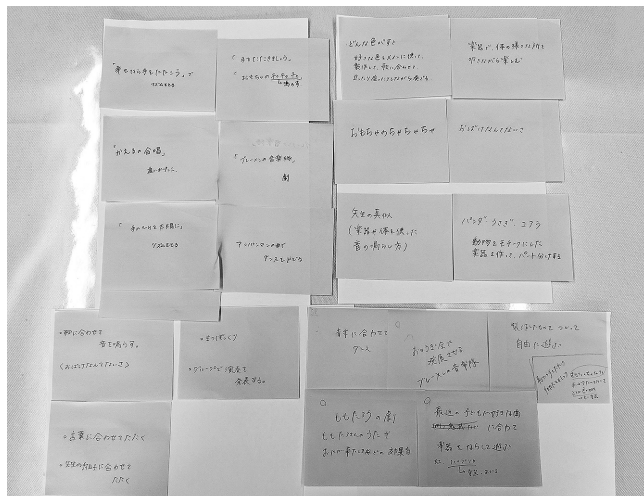


写真7. グループワーク意見シート

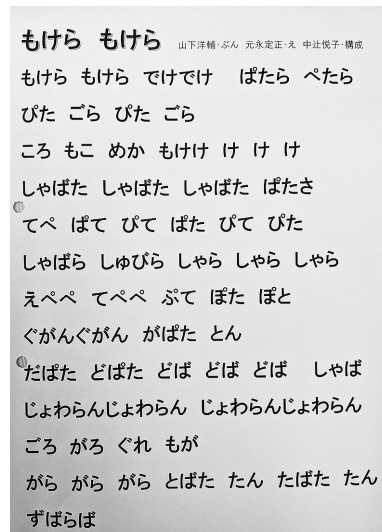


図1. 学生に配布した絵本資料

たり、曲中の動物になりきって動きを加えたりすることで、各曲調にあう楽器を見つけ合ったり、お互いの楽器の奏で方を提案する姿が見られた。

その後、4人ずつのグループに分かれ、グループワークを行った。『楽器づくりの活動から、子どもたちの表現はどのように発展していくか』をテーマとし、それぞれの考えを付箋に記入した後、グループで意見を出し合い発表を行った(写真7)。「楽器で体のさまざまな所をたたいて音を出しな

がら楽しむ」「グループに分かれて演奏を考える」「言葉や先生の手拍子に合わせて鳴らす」「音楽に合わせてダンス」など、子どもの姿をイメージした意見がでた。

また、歌に合わせて奏でる活動として、『幸せなら手をたたこう』『おもちゃのチャチャチャ』『どんな色が好き』『ぱんだ うさぎ こあら』『カエルの合唱』などの曲が上がった。子どもがリズムを取りやすく、楽器の音が活きる選曲であ

表3. 「音をかたちに～イメージを共有しよう～」計画

時間	活動の流れ	準備
0' 00	1. 絵本「もけらもけら」紹介 ・絵本「もけらもけら」を読み語りと音で表現する。(中村・山中) 学生は目を閉じて聞く。	絵本 コピー
0' 10	2. 「もけらもけら」を音・形・色で表現する ・3人1組になり、表現する箇所を決める。 ・場面に合う色・形を伝えあい、絵具で表現する。 ・場面に合う音を考え、小打楽器を鳴らし、音を決める。 ・音と色・形の表現が適しているか検討し、発表の準備をする。	模造紙 絵具 小打楽器
0' 45	3. グループの発表(6グループ) ・それぞれ選んだ場面を、「絵本読み」「楽器」「色・形」で表す。(描いたものはホワイトボードに貼る)	
1' 00	他グループの表現を鑑賞し、感想を記し、終了	感想用紙

る。また、「ブレーメンの音楽隊」「ももたろう」などの劇に発展するとの意見もあった。

最後に感想を記入し、活動を終了した(表2)。

B:「音をかたちに～イメージを共有しよう～」(表3)

日時:令和3年6月30日

場所:図工室

指導:中村・山中

参加:学生16名(幼児とうた表現・造形表現ゼミナール)

題材とする絵本「もけらもけら」は、ストーリーや絵でははっきりとした筋書きは無く、オノマトペと抽象画で構成された絵本である。言葉の響きの面白さと、抽象的な絵の動きを楽しむことが出来る作品であり、語り手の口調や読み手の受け取り方によってイメージは多様に変化する。今回の活動では、絵本は提示せず、文字のみをプリントした資料を配布した(図1)。

最初に、教員が読み語りに合わせて電子ピアノで音を表現し、学生は目を閉じて鑑賞した。その後、3～4人ずつのグループに分かれ、表現したい言葉の箇所を選び、相談を重ねて模造紙に形と色で表現していった(写真8)(写真9)。使用す



写真8. 手形を使った表現



写真9. ローラーを使った表現

る道具として、筆、ローラーを準備していたが、指や手を使って描く姿も見られた。次に、選んだ場面を表現するのに適した音選びを行った。さまざまな小打楽器を手に取り、音を鳴らしながらグループで音を選ぶ姿が見受けられた。トライアングルの持ち方を変えたり、リズムの刻み方で変化をつけたり、ピアノのホースをこすってギロのように使う工夫もあった。

完成した絵をホワイトボードに貼り、グループで「読み手」「演奏者」の役割に分かれて発表し合い、感想を書いて活動を終了した(表4)。

6. 考 察

6-1. A 「手作り楽器でリズム遊び」

さまざまな素材を使って楽器を作ることで、素

表4. 「音をかたちに～イメージを共有しよう～」感想

今日の活動を通して感じたこと、考えたこと	他者の表現を見て、どのようなことを思ったか
・絵本を見ずに、音だけでイメージして表現する活動を通して、同じフレーズでも、それぞれ表現に個性が出ることを感じた。 ・擬音語から音や色を想像して表現することは難しかったけれど、表現してみると楽しく、他の人が想像していたものと違うことが面白かった。 ・音を色や形で表現することは難しかったけれど、出来上がったものを見ると、それぞれ個性豊かで素敵な作品だと思った。 ・たくさんの楽器や絵具を使って自由に表現することは、子どもたちも喜びそうな活動だと思った。 ・同じフレーズの箇所でも、楽器、音の出し方、絵の描き方がさまざまで、人によっていろいろな感じ方があるのだと感じた。 ・意味がない言葉でも、いろいろな情景が浮かび楽しかった。 ・音と製作で表現する楽しさを知った。 ・子どもが絵本の内容をイメージしやすくするために、抑揚をつけたり速度をかえたりするなどの工夫も必要だと感じた。 ・絵や音で表現するにあたり、互いに様々な意見を出し合って話が広がったので良い活動であった。 ・音での表現は、速度によって感じ方が違うと思った。 ・絵本の読み聞かせは、絵を見せながらが当たり前だと思っていたが、絵がないと様々なイメージがでてくるので面白く、自分も子どもたちの前でやってみたいと思った。	・自分では思いつかない表現を知ることが出来、さまざまな表現の仕方があることを知ることが出来た。 ・人それぞれ、聞くもの見るものの感じ方、受け止め方は違うのだと改めて感じた。 ・声のトーンを低くしたり高くしたりすることで面白みが増すように感じた。 ・グループでも、同じようなイメージをもっていたり、全く違うイメージがでてきたりしたことが面白い発見だった。 ・ウッドブロックで音を面白く表現したり、トライアングルで涼やかに表現したり、虹のような絵や少し怖い絵など様々な表現を見ることが出来た。 ・他グループの発表を聞いて、読み方の工夫によってよりイメージが湧くと感じたので、今後の自分自身の課題にしたい。 ・グループによって、言葉のイメージをそのまま表現するグループと、言葉から連想したものを表現しているグループがあり、自分では思いつかない表現があって勉強になった。 ・言葉から、足音や波の感じなど具体的な音を連想し、表現していたところが、とても良いと思った。

材の特性や接着の仕方、装飾の工夫など造形技術について学ぶ他、使う素材や作り方によって音が変化することにも気づくことができたと推測された。また、製作の場面では、他者の楽器づくりからアイデアを共有し、学生同士で知恵を出し合いながら更に納得のいくものを作るという姿勢が見られた。

学生の感想の中には、「楽器を作るだけでなく、作った後の流れ次第で、遊び方や表現の場は無限に広がると思った」「廃材が楽器になるという製作も楽しいが、作った後も音遊びができることが良いと思った」など、造形表現から音楽表現へと展開することの楽しさを記述したものが見られた。

更に、「一つの歌でも、歌い方を変えたり、音の鳴らし方をアレンジすることで子どもの思考力を育てることに繋がると感じた」「一つの楽器で、多くの活動に展開できることを知り、自身の保育に活かしたい」など、保育者として子どもの活動を計画する視点を持った感想も見られた。これは、

自身の表現の楽しさだけでなく、子どもの表現を支える保育者の立場を意識しての感想である。

また、「子どもたちが作りたいものを作ることが出来るように、材料の種類をたくさん準備すること必要だと感じた」という感想は、子どもが自由に表現できる環境を整える保育者の役割に気付き記述したものである。製作する楽器を自分で自由に選べることは、製作意欲につながる要素であると推測された。

保育者が子どもの表現を支えるにはどのようなことが大切かの問には、「保育者も活動を楽しみ、製作してからの展開を大切にしながら活動計画をたてる」「子どもが自由に考えたり表現することができ、発展していける活動を計画する」など『点ではなく、線として広がりつながっていく保育』¹⁰⁾を意識した感想が見られた。また、「製作するだけでなく、それをどのように活かしていくか、皆の意見を聞いて、よい学びになった。実際に役立てたい」「グループで話し合うことで多く

の案を聞くことが出来て良かった」など、グループで活動の広がり話し合うことで、様々な意見を聞くことができ、保育者としての活動計画に役立つという意見もあった。表現活動を行うだけでなく、「子どもたちだったら、どんな遊びに発展するか」という問いを投げかけることで、保育者の視点に立って子どもの表現について想像を広げるきっかけになったと考えられた。

6-2. B「音をかたちに～イメージを共有しよう～」

最初は音から色や形を表現することが難しい学生もいたが、各グループで話し合いながら表現を深めていくことで、各グループ個性的な表現が生まれた。この課題は、自分の中にあるイメージを他者に伝えたり、他者のイメージを取り入れたりしながらグループでの表現の面白さに気付くことに意義がある。

感想の中には「絵や音で表現するにあたり、互いに様々な意見を出し合って話が広がったので良い活動であった」「同じフレーズでも、それぞれ表現に個性が出ることを感じた」「グループでも、同じようなイメージをもっていたり、全く違うイメージがでてきたりしたことが面白い発見だった」などがあり、それぞれの感じ方や表現を言葉にしたり図に描いたりしながら、他者と自分の感じ方の違いに気づき、そのことを面白いと感じることができたことがうかがえた。

また、「声のトーンを低くしたり高くしたりすることで面白みが増すように感じた」「他グループの発表を聞いて、読み方の工夫によってよりイメージが湧くと感じたので、今後の自分自身の課題にしたい」「子どもが絵本の内容をイメージしやすくするために、抑揚をつけたり速度をかえたりするなどの工夫も必要だと感じた」など、言葉の速度や読み方によってイメージが変わることに気づき、絵本を読む際の声の発し方を課題に挙げた学生もいた。

最後にグループの表現を発表することで、「同じフレーズの箇所でも、楽器、音の出し方、絵の描き方がさまざま、人によっていろいろな感じ

方があるのだと感じた」「自分では思いつかない表現を知ることができ、さまざまな表現の仕方があることを知ることが出来た」など、表現の多様性への気づきがうかがえた。また、「絵本の読み聞かせは、絵を見せながら行うのが当たり前だと思っていたが、絵がないと様々なイメージがでてくるので面白く、自分も子どもたちの前でやってみたいと思った」と、視覚を重視しないことで様々なイメージが広がることへ関心を寄せ、保育に活かせるのではないかという意見もあった。

学生は、造形の授業で作品を鑑賞し合ったり、音楽の授業でピアノでの演奏や歌を披露したりする機会はあるが、絵本の場面を音や色・形で表現することは初めてであった。言葉から連想するイメージを他者と伝えあい、色や形で表現したり、表現に適した音を探したりすることは、自分自身の感じ方を意識し明確にしていくことである。また、学生の感想から、様々な方法を使ってイメージを伝えあうことの面白さを知ることができたことが推察された。

7. ま と め

本稿は、造形表現と音楽表現を関連させた活動を実施することによって、保育学生が表現の関係性を理解し、総合的な保育について主体的に考えることのできる科目横断的な授業について示唆を得ることを目的とした。

学生のアンケート記述には、保育者として幼児の活動を想定した内容が見られ、表現活動をどのように保育に結び付けていくかという思考や、保育を行う際の自身の課題が挙げられた。これは、学生が領域の関係性を考慮しながら総合的な保育について主体的に考える姿勢と捉えられる。また、表現活動の展開を考えるグループワークによって、他者のアイデアを知り、保育者の視点に立って子どもの表現について想像を広げることができるとアンケート記述により確認された。自分の中にあるイメージを他者に伝えたり、他者のイメージを取り入れたりしながらグループワークを行うことは、幼児の表現を支える保育者にとって、表現の多様性に気づき、許容する経験という点で必

要であると考ええる。

上記から、音楽表現、造形表現を組み合わせた具体的な活動を授業として提示し、実践することは、学生が表現のつながりを意識するきっかけとなることが推測された。よって、保育学生が領域の関係性を理解し、総合的な保育について主体的に考えるためには、科目を越えた総合的な授業実践が有効であると考えられた。

現在実施されている科目毎による専門的な学びを基に、各分野の教員が共同で授業を構成することで、表現の広がりや深まりによる保育の質の向上が期待される。専門分野の知識を保育の中で活かすには、領域と領域を生活や遊びに落とし込み、つなげ、広げる技術が必要である。そのためには、各教員が他分野のねらいや内容を理解し、活動が互いに発展していけるような授業計画が必要であると考ええる。保育学生が、学生時代に授業を通して保育計画のモデルを体験することは、保育を行う上での自信にもつながる経験であろう。専門科目を担当している教員の、保育を意識した視点と授業計画が求められる。

本研究では、「子どもとうた表現ゼミナール」「造形表現ゼミナール」の学生に授業を行った。ゼミナールは音楽や造形を深く学ぶ意欲のある学生が受講しているため、活動が主体的に行われ、多様な表現が示されたことは、表現領域に対して肯定的な感情を持つ学生が集まったことに起因するとも考えられる。全体で授業を行う場合は、表現活動に消極的な学生にも取り組みやすい工夫が必要である。また、音楽表現、造形表現だけでなく、身体表現や言語表現、他領域とのかかわりによって発展する活動について総合的に検討し、保育学生にとって実りある授業を実施することが今後の課題である。

付記

本研究の着想、授業実践は、中村・山中が共同で行った。本稿の執筆は山中が担当し、中村が加筆、改訂を行った。

註

- 1) 『平成29年告示幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領』(2017)チャイルド本社, pp. 7-9
- 2) 平田智久(2010)「第8章造形に対する感性と表現」『最新保育講座11保育内容「表現」』ミネルヴァ書房, pp. 117-131
- 3) 智原江美・鍋島恵美・和田幸子・下口美帆・田中慈子(2015)「幼稚園・保育所における表現領域の活動に対応した保育者養成教育のあり方ー京都府南部の幼稚園・保育所へのアンケート調査からの検討ー」『京都光華女子大学研究紀要』53号, pp.119-134
- 4) 藤掛絢子・北野幸子(2018)「音楽表現領域における保育者養成教育の検討ー実習経験を踏まえた学生の学びを通してー」『保育者養成教育研究』, pp. 23-33
- 5) 椎橋げんき・大貫麻美・石沢順子・宮下孝広(2018)「「投げる」能力を育む教科横断型学習プログラムの開発に向けて(3): 図画工作科の視点からの教材開発」『白百合女子大学初等科教育紀要』第4号, pp. 37-43
- 6) 藤井美津子(2019)「保育者養成校における表現指導の取り組みー授業の実践と学生の記録の分析から表現の深まりを目指してー」『滋賀文教短期大学紀要』, pp. 1-18
- 7) 細田淳子・熊田藤作(1993)「音楽・造形表現の総合化について: 表現の理念と計画」『東京家政大学研究紀要 人文社会科学』33, pp. 31-138
- 8) 豊泉尚美・鹿戸一範(2018)「子どもの興味・関心から始まるプロジェクト・アプローチー音楽表現・造形表現・身体表現をつなぐ実践を通して考えるー」『秋草学園短期大学紀要』35号, pp. 152-160
- 9) 磯部錦司・福田泰雅(2015)『保育の中のアート』小学館, pp. 8-20
- 10) 福山多江子・大塚良一・田中浩二(2013)「幼稚園実習のスキルと責任実習での傾向と課題(その1)ー東京成徳短期大学の幼稚園実習アンケートからー」『東京成徳大学紀要』第46号, pp.39-47
- 11) 山下洋輔文・元永定正絵・中辻悦子構成(1990)『もけらもけら』福音館書店